

## 「銀座アルプス」

寺田寅彦

幼時の記憶の闇やみの中に、ところどころぼうつと明るく照らし出されて、たとえば映画の一断片のように、そこだけはきわめてはっきりしていながら、その前後が全く消えてしまった、そういう部分がいくつか保存されて残っている。そういう夢幻のような映像の中に現われた自分の幼時の姿を現実のこの自分と直接に結びつけて考えることは存外むつかしい。それは自分のようでもあり、そうでないようでもある。自分と密接な関係のあることは確実であるが、現在の自分とのつながりがすっかり闇の中に没している。その、絶えているかつながっているかわからないようなつながりを闇の中に探り出そうとするときに、われわれは平素頼みにしている自分の理性のたよりなさを感じる。そうして人間の意識的生活というものがほんとうに夢か幻のようなものであるように思われて来るのである。そういう記憶の断片がはたしてほんとうにあったことなのか、それとも、いつかずっと後年になってから見た一夜の夢の映像の記憶を過去に投影したものだか、考えるとかえってわからなくなって来る。それを疑っていると、幼時のみならず過去のあらゆる記憶の現実性がきわめて頼み少ないものになって来るのである。

自分の幼時のそういう夢のような記憶の断片の中に、明治十八年ごろの東京の銀座ぎんざのある冬の夜の一角が映し出される。

その映画の断片によると、当時八歳の自分は両親に連れられて新富座しんとみざの芝居を見に行ったこ

とになっている。それより前に、田舎いなかで母に連れられて何度か芝居を見たことはあったようであるが、東京の芝居を見たのはおそらくその時がはじめてであつたらしい。どんな芝居であつたかほとんど記憶がないが、ただ「船弁慶」で知盛の幽霊ともしもりが登場し、それがきらきらする薙刀なぎなたを持つて、くるくる回りながら進んだり退いたりしたその凄惨せいさんに美しい姿だけが明瞭めいりょうに印象に残っている。それは、たしか先代の左団次さだんじであつたらしい。そうして相手の弁慶はおそらく団十郎だんじゅうろうではなかつたかと思われるが、不思議と弁慶の印象のほうはきれいに消えてなくなつてしまつてゐる。しかし時の敗者たる知盛の幽霊に対して、子供心にもひどく同情といふかなんというかわからない感情をいただいたものと見えて、そういう心持ちが今でもちゃんと残留しているのである。

芝居茶屋というものの光景の記憶がかすかに残っている、それを考えると徳川時代の一角をのぞいて来たような幻覚が起こる。

芝居がはねて後に一同で銀座までぶらぶら歩いたものらしい。そうして当時の玉屋たまやの店へはいつて父が時計か何かをひやかしたと思われる。とにかくその時の玉屋の店の光景だけは実にはっきりした映像としていつでも眼前に呼び出すことができる。

夜ふけて人通りのまばらになつた表の通りには木枯らしが吹いていた。黒光りのする店先の上がりがまち櫃びに腰を掛けた五十歳の父は、狍虎らっこの毛皮えりの襟えりのついたマントを着ていたようである。

その頭の上には魚尾形ぎよびけいのガスの炎が深呼吸をしていた。じよさいのない中老店員の一人は、顧客の老軍人の秘蔵子らしいお坊っちゃんびろうどの自分の前に、当時としてはめつたに見られない舶来の珍しいおもちゃを並べて見せた。その一つはねずみ色の天鵞絨びろうどで作つた身長わずかに五六寸

くらいの縫いぐるみの象であるが、それが横腹の所のネジをねじると、ジャージャーと歯車のすれ合う音を立てながら走りだす、そうしてあの長い鼻を巧みに屈伸して上げたり下げたりしながら勢いよく走るのである。もう一つは毛深い熊くまがあと足を前に投げ出してすわっている、それが首と前足を動かして滑稽こっけいな格好をして踊りだすと腹の中でオルゴールのかわいらしい音楽が聞こえて来るのである。

父がもしかしたら、どれか一つは買ってくれるかと思っていたが、ねだるのにはあまりに立派すぎる貴族的なおもちゃなので遠慮していたら、やはりとうとう買ってくれなかった。それから人力じんりきにゆられて夜ふけの日比谷御門をぬけ、暗いさびしい寒い練兵場へいばたわきの濠端ほりばたを抜けて中六番町なかくろくばんちょうの住み家へ帰って行った。その暗い丸まるの内の闇やみの中のところどころに高くそびえたアーク燈さんらんが燦爛たる紫色の光を出してまたいたような気がする。そのころすでにそんなものがあつたかどうか事實はわからないが、自分の記憶の映画にはそういうことになっているのである。

この銀座ぎんざの冬の夜の記憶が、どういうものかひどく感傷的な色彩を帯びて自分の生涯しょうがいにつきまとって来た。それにはおそらく何か深い理由があるであろうが、それに関する手がかりは、自分の意識の世界からはどうしても探り出すことができないのである。その日の事を特に強い印象として焼き付けるだけの「光線」があつたであろう、その光線はとうの昔に消えて、一枚の印画だけが永久に残っているのである。人殺しをした瞬間に偶然机の上におかれてあつた紙片の上の文字が、殺人者の脳に焼き付いたような印象となつて残つたという話があるが、これに似た現象は存外きわめて普通なことであるかもしれない。幼時の記憶の断片にはたいい何かしらそういう「光線」があつて、そのほうは当時「意識」されなかつたために記憶から消え

てしまうのではないかと思われる。

晩年になって母にたびたび聞かされたところによると、当時の自分はひどく鉄道馬車に乗るのが好きで、時々書生や出入りのだれかれに連れられてはわざわざ乗りに行ったものだそうである。雨の降る日に二条の鉄路の中央のひどいぬかるみの流れを蹴たててペンキ塗りの箱車を引いて行く二頭のやせ馬のあわれな姿や、それが時々爆発的に糞ふんをする様子などを思い出すことはできる。鉄路が悪かったのか車台の安定が悪かったのか、車は前後におじぎをするように揺れながら進行する。車掌が豆腐屋のような角笛つがえを吹いていたように思うが、それはガタ馬車の記憶が混同しているのかもしれない。実際はベルであったかもしれない。しかし角笛であったような気がするというわけはこの馬車の記憶に結びついて離れることのできない妙な連想があるからである。それは、そのどこかからもらった高価な舶来ビスケットの箱が錠前付きのがんじょうなブリキ製であったが、その上面と四方の面とに実に美しい油絵が描かれていた。その絵の一つが英国の田舎いなかの風景で、その中に乗客を満載した一台の郵便馬車メールコーチが進行している。前世紀の中ごろあたりの西洋といえは想像されるような特別な世界が、この方四五寸の彩色美しい絵の中に躍動しているのである。この小さな菓子箱のふたを通してのぞいた珍しい世界がどんなに美しくなつかしいものであったか、ずっと晩年にほんとうの西洋へ行つて見ても、この「夢の西洋」はどこにもなかった。この菓子箱のふたは自分の幼時の「緑の扉とびら」であったのである。それはとにかく、この絵の中のロンドン、リーディング間\*の郵便馬車の馬丁がシルクハットをかぶってそうしてやはり角笛を吹いている。そうして自分の「記憶」の夢の中では、この郵便馬車と、銀座ぎんざの鉄道馬車とがすっかり一つに溶け合ってしまったって、切っても切れない

連想の糸でつながり合っているのである。

明治十九年にはもう東京を去って遠い南海の田舎に移った。そうして十年たった明治二十八年の夏に再び単身で上京して銀座尾張町の竹葉の隣のI家の二階に一月ばかりやつかいに

なっていた。当時父は日清戦役のために予備役で召集され、K留守師団に職を奉じながら

にっしんせんえき

こうじまちくひらかわちやう  
麴町区平河町のM旅館に泊まっていたのである。

Iの家の二階や階下の便所の窓からは、幅三尺の路地を隔てた竹葉の料理場でうなぎを焼く

うちわ

団扇の羽ばたきが見え、音が聞こえ、においが嗅がれた。毘沙門かなんかの縁日にはI商店の

\*

こうしど

格子戸の前に夜店が並んだ。帳場で番頭や手代や、それからむすこのSちゃんといっしょに寄り集まっているいろいろの遊戯や話をした。年の若い店員の間には文学熱が盛んで当時ほとんど唯

一であったかと思われる青年文学雑誌「文庫」の作品の批評をしたりしたことであった。中で

いちばん年とった純下町型のYどんは時々露骨に性的な話題を持ち出して若い文学少年たちか

ら憤慨排斥された。夜の三時ころまでも表の人通りが絶えず、カンテラの油煙が渦巻いていた。

うずま

明け方近くなっても時々郵便局の馬車がけたたましい鈴の音を立てて三原橋のあたりを通過して

みはらばし

行った。奥の間の主人主婦の世界は徳川時代とそんなに違わないように見えた。主婦は江戸で

生まれてほとんど東京を知らず、ただ音羽の親類とお寺へ年に一度行くくらいのものであった。

おとわ

ほとんどわが子のように自分をかわいがってくれたが、話をするのがわからないので困った。

自分の世界の事を相手が全部知っているという仮定を置いての話であるからわかりにくいのであった。

むすこのSちゃんに連れられては京橋近い東裏通りの寄席へ行った。暑いころの昼席だと

きやうばし

よせ

聴衆はほんの四五人ぐらいのこともあった。くりくり坊主の桃川如燕ももかわじよえん\*が張り扇で元亀天正

の武将の勇姿をたたき出している間に、手ぬぐい浴衣ゆかたに三尺帯の遊び人が肱枕ひじまくらで寝そべって、

小さな桶形おけがたの容器すしの中から鮓すしをつまんでいたりした。西裏通りへんの別の寄席よせへも行った。

伊藤痴遊いとうちゆう\*であつたかと思う、若いのに漆黒の頬髯ほおひげをはやした新講師が、維新時代の実歴談を

話して聞かせているうちに、偶然自分と同姓の人物の話が出て来た。Sが笑い出したら、講談師も気がついたか自分の顔ばかり見ながらにやにやして話をつづけた。

銀座ぎんざの西裏通りで、今のジャーマンベーカリの向かいあたりの銭湯へはいりに行っていた。

今あるのと同じかどうかはわからない。芸者がよく出入りしていた。首だけまっ白に塗ってあごから上の顔面は黄色ないしは桃色にして、そうして両方のたばを上向きにひっくりかえしているのが田舎少年いなかの目には不思議に思われた。それから、五丁目あたりの東側の水菓子屋で食わせるアイスクリームが当時の自分には異常に珍しくまたうまいものであった。ヴァニラの香

味がなんとも知れず、見た事も聞いた事もない世界の果ての異国への憧憬どうけいをそそののであった。

それを、リキュールの杯はちぐらいな小さなガラス器に頭を丸く盛り上げたのが、中学生にとつて

はなかなか高価であつて、そうむやみには食われなかった。それからまた、現在の二葉屋ふたばやのへ

んに「初音はつね」という小さな汁粉屋しるこやがあつて、その御膳汁粉ごぜんじるこが「十二か月」のより自分にはう

まかつた。食うという事は知識欲とともに当時の最大の要事であつたのである。

父に連れられてはじめて西洋料理というものを食つたのが、今の「天金てんぎん」の向かい側あたりの洋食店であつた。変な味のする奇妙な肉片を食わされたあとで、今のは牛の舌だと聞いて胸

が悪くなって困った。その時に、うまいと思ったのは、おしまいの菓子とコーヒーだけであった。父に連れられて「松田」<sup>まつだ</sup>で昼食を食ったのもそのころであったように思う。玉子豆腐の朱わんのふたの裏に、すり生姜<sup>しょうが</sup>がひとつまみくっつけてあったことを、どういうわけか覚えてい  
る。父が何かしらそれについて田舎と東京との料理の比較論といったようなものをして聞かせ  
たようであった。

天狗煙草<sup>てんぐたばこ</sup>が全盛の時代で、岩谷<sup>いわや</sup>天狗<sup>まっへい\*</sup>の松平氏が赤服で馬車を駆っているのを見た記憶があ  
る。店の紅殻色<sup>べんがらいろ</sup>の壁に天狗の面が暴戻<sup>ぼうれい</sup>な赤鼻を街上に突き出したところは、たしかに気の弱  
い文学少年を圧迫するものであった。松平氏は資本家で搾取者であつたらうが、彼の闘志と赤  
色趣味とは今のプロレタリア運動にたずさわる人々と共通なものをもっていた。しかしまたピ  
ンヘッドやサンライズ<sup>\*</sup>を駆逐して国産を宣伝した点では一種のファシストでもあつたのである。  
彼もたしかに時代の新人ではあつた。

旧時代のハイカラ岸田<sup>きしだぎんこう\*</sup>吟香の洋品店へ、Sちゃんが象印の歯みがきを買いに行ったら、ど  
う聞き違えたものか、おかしなゴム製の袋を小僧がにやにやしながら持ち出したと言って、ひ  
どくおかしがって話したことを思い出す。Sは口ごもって、ひどくはにかんだように物を言う  
癖があつたのである。幼い岸田<sup>りゅうせい</sup>劉生氏があるいはそのころ店先をちよこちよこ歩いていたか  
もしれないという気がする。

新橋詰め<sup>しんばし</sup>の勸工場がそのころもあつたらしい。これは言わば細胞組織の百貨店であつて、後  
年のデパートメントストアの予想<sup>アンチンペーシヨン</sup>であり胚芽<sup>エンブリオ</sup>のようなものであつたが、結局はやはり

小売り商の集团的蜂窩ほうかあるいは珊瑚礁さんごしょうのようなものであったから、今日のような対小売り商の問題は起こらなくても済んだであろう。とにかく、これは、田舎者が国いなかものへのみやげ物を物色するには最も便利な設備であった。それから考えると、東京市民の全部がことごとく「田舎者」になった今日、デパートの繁盛するのは当然であろう。ただ少数な江戸っ子の敗残者がわざわざちくせん\* 竹いせよし\* 仙いせよし\*の染め物や伊勢由のはき物を求めることにはかない誇りを感じるだけであろう。しかしデパートの品物に「こく」のある品のまれであることも事実である。

明治三十二年の夏、高等学校を卒業して大学にはいったのでちょうど四年目に再び上京した。谷中やなかの某寺に下宿をきめるまでの数日を、やはり以前の尾張町おわりちようのI家でやつかいになった。谷中へ移ってからも土曜ごとにはほとんど欠かさず銀座ぎんざへ泊まりに行った。当時、昔の鉄道馬車はもう電車になっていたような気がするが、「れんが」地域の雰囲気ふんいきは四年前とあまり変わりはなかったようである。ただ中学生の自分が角帽をかぶり、少年のSちゃんが青年のS君になつていつのまにか酒をのむことを覚えていたくらいであった。熊本で漱石先生くまもとに手引きしてもらって以来俳句に凝って、上京後はおりおり根岸ねぎしの子規庵しきあんをたずねたりしていたころであったから、自然にI商店の帳場に新俳句の創作熱を鼓吹したのかもしれない。当時いちばん若かったKちゃんが後年ひとかどの俳人になって、それが現に銀座裏河岸うらがしに異彩ある俳諧はいかいおでん屋を開いているのである。

鍋町なべちようの風月ふうげつの二階に、すでにそのころから喫茶室きつしつがあつて、片すみには古色蒼然そうぜんたるポコポコのピアノが一台すえてあつた。「ミルクのはいったおまんじゅう」をこちそうすると聞いた

S君が自分を連れて行ったのがこの喫茶室であった。おまんじゅうはすなわちシュークリームであったのである。シューというのはフランス語でキャベツのことだとS君が当時フランス語の独修をしていた自分に講釈をして聞かせた。

運命の神様はこの年から三十余年後の今日までずっと自分を東京に定住させることにきめてしまった。明治四十二年から四年へかけて西洋へ行っている間だけがちよつと途切れてはいるが、心持ちの上では、この明治三十二年以後今日まではただひとつながりの期間としか思われない。従って自分の東京と銀座に関する記憶は、――のような三つの部分から成り立っている。この最後の長線はどこまで続くか不明である。第一の短線と第二の短線との間が約十年でこの二つははっきり分かれている。第二短線と第三長線との間は四年しかないので、第三線の初めごろの事がらがかさすると第二線内の事がらの中に紛れ込んで混同する恐れがある。第三線の長さは約三十年であるが、事がらによっては三十年前がつい近ごろのように思われ、また事がらによっては去年の事が十年前のようにも思われる。ひとつながりの記憶の蛇形池サーペンタインの中で「記憶の対流コンヴェクション」とでもいったようなものが行なわれるらしい。

第三線にはかなりの幅がある。自分が世間に踏み出してからの全生涯ぜんしやうがいがこの線の中に含まれているからである。そうしてこの線を組織するきわめて微細な繊維のようになった自分の「銀座線ぎんざせん\*」とでもいったようなものがあり、これが昔の――の中の銀座の夢につながっているのである。この――の中では銀座というものが印象的にはかなり重要な部分を占めていた、その影響が後年の――の中の自分の銀座観に特別の余波を及ぼしていることはたしかである。

震災以後の銀座には昔の「煉瓦れんが」の面影はほとんどなくなってしまった。第二の故郷の一つであったIの家はとうの昔に一家離散してしまったが家だけは震災前までだいたい昔の姿で残

つっていたのに今ではそれすら影もなくなつてしまい、昔帳場格子ちやうばごうしからながめた向かいの下駄屋げたやさんもどうなったか、今三越みつこしのすぐ隣にあるのがそれかどうか自分にはわからない。十二月の汁粉屋しるこやも裏通りへ引つ込んだようであつたがその後の消息を知らない。足もとの土でさえ、舗装の人造石やアスファルトの下に埋もれてしまつてゐるのに、何をなつかしむともなく、尾張町おわりちやうのあたりをさまよつては、昔の夢のありかを捜すような思いがするのである。

谷中やなかの寺の下宿はこの上もなく暗く陰気な生活であつた。土曜日に尾張町へ泊まりに行くと明るくて暖かでにぎやか過ぎて神経が疲れたが、谷中やなかへ帰るとまた暗く、寒く、どうかすると

寒の雨降る夜中ごろにみかん箱のようなものに赤ん坊のなきがらを収めたさびしいお弔いが来たりした。こういう墓穴のような世界で難行苦行の六日を過おした後に出て見た尾張町おわりちやうの夜の

灯ひは世にも美しく見えないわけに行かなかつたであろう。今日いわゆるギンブラをする人々の心はさまざまであろうが、そういう人々の中の多くの人の心持ちには、やはり三十年前の自分のそれに似たものがあるかもしれない。みんな心の中に何かしらある名状し難い空虚を感じてゐる。銀座ぎんざの舗道みちを歩いたらその空虚が満たされそうな気がして出かける。ちよつとした買い物でもしたり、一杯の熱いコーヒーでも飲めば、一時だけでもそれが満たされたような気がする。しかしそんなことでなかなか満たされるはずの空虚ではないので、帰るが早い、またすぐに光の町が恋しくなるであろう。いったいに心のさびしい暗い人間は、人を恐れながら人を恋しがり、光を恐れながら光を慕う虫に似ている。自分の知つた範囲内でも、人からは仙人せんじんのように思われる学者で思いがけない銀座の漫歩を楽しむ人が少なくないらしい。考えてみると

このほうがあたりまえのような気がする。日常人事の交渉にくたびれ果てた人は、暇があったら、むしろ一刻でも人寰じんかんを離れて、アルプスの尾根でも縦走するか、それとも山の湯に浸って少時の閑寂を味わいたくなるのが自然であろう。心がぎやかでいっぱいに充実している人には、せせこましくごみごみとした人いきれの銀座を歩くほどばかりしくも不愉快なことはなく、広大な山川の風景を前に腹いっぱい深呼吸をして自由に手足を伸ばしたくなるのがあたりまえである。F屋喫茶店きつさてんにいた文学青年給仕のM君はよく、銀座なんか歩く人の気が知れないと言っていたが、考えてみれば誠にもつとも至極なことである。

アルプスと言えば銀座にもアルプスができた。デパートの階段を頂上まで登るのはなかなかの労働である。そうして夏の暑い日にその屋上へあがれば地上百尺、温度の一度や二度ぐらいは低い。上には青空か白雲、時には飛行機が通る。駿河の富士するがや房総ぼうそうの山も見える日がある。

ついでに屋上さらに三四百尺の鉄塔を建てて頂上に展望台を作るといいと思う。その側面を広告塔にすれば気球広告よりも有効で、その料金を建設費はまもなく消却されるであろう。高い所に上がりたがるのは人間というものに本能的な欲望である。この欲望は赤ん坊の時からすでに現われる。自分が四歳の時に名古屋なごやにいたところのかすかな思い出の中には、どこか勝手口のような所にあつた高い板縁へよじ上ろうよじ上ろうとしてあせつたことが一つの重大な事項になつていたのである。これに似た記憶は多くの人に共通なものであろう。この本能を守り立てればアルピニストになれる。エヴェレストの頂上をきわめようとして、それがために貴重な生命をおとしても悔やまないようになる。それで、事によるとデパートのはやる理由のことごとくが必ずしも便利重宝一点張りのものでもないかもしれない。そうでないとすると小売り商の作戦計画にはこの点を考慮に入れなければなるまい。

デパートアルプスには、階段を登るごとに美しい物と人との「お花畑」がある。勝手に取って持つて来ることは許されないが、見るだけでも目の保養にはなる。千円の晴れ着を横目ににらんで二十銭のくけひもを買えば、それでその高価な帯を買ったような不思議な幻覚を生ずる事も可能である。陳列されてある商品全部が自分のもので、宅へ置ききれないからここへ倉敷料なしのただで預けてあると思えば、金持ち気分になりすますことも容易である。入用なときはいつでも「預かり証」と引き換えに持つて帰ることができるのである。ただ問題は、肝心の時にその「預かり証」がなくなっていることである。

アルプスにも山火事があるように、デパートにも火事がある。山火事は谷から峰へと燃え上がるが、また上から下へも燃えて行く。しかし、デパートの火事は下へは燃えないで、上へばかり燃え抜けるから、逃げ道さえあいていれば下へ逃げればよい。下へ逃げそこなったら頂上の岩山の燃え草のない所へ行けば安全である。白木屋しろきやの火事の時に、屋上が焼け落ちるかもしれないと言っておどかさす途方もない与太郎があつたそうであるが、鉄筋コンクリートの岩山は火には決して焼けくずれない。しかも熱伝導がきわめて悪いから下で半日焼けても屋上でははき物をはいた足の裏を焼けどする心配もない。窓からのぼる煙が渦巻うずまいて来たら床の面へ顔をつければよいかと思われる。しかし、それも何千人と折り重なつては困るであろうし、また満員のデパートに急な火が起これば階段が人間ですし詰めになつて閉塞へいそくしてしまう恐れがある。映画館の火事でそういう実例がたびたびあつた。そういう時にいちばんだいじなのは遭難者の訓練であるが、いちばんむつかしいのもまたその訓練である。

火事は物質の燃焼する現象であるからやはり一種の物理化学的現象である。この現象は日本には特別多い。それなのに日本の科学者で火事の研究をする人の少ないのは不思議である。西

洋の大学のどこにもまだ火災学という名前の講義をしている所がないからであるかもしれない。それはとにかく、よほど用心しないと、デパートというものは世にも巧妙な大量殺人機械になる恐れが充分にある。燃料を満載してある上に、しかも発火すると同時に出口が人間で閉塞し、その生きた栓せんが焼かれる仕掛けになっているからである。山火事の場合は居合わす人数の少ないだけに、損害は大概莫大ではあるが、金だけですむ。

デパートアルプスの頂上から見おろした銀座界隈ぎんざかいわいの光景は、飛行機から見たニューヨーク、マンハッタンへんのようにはなはだしい凹凸おうとつがある。ただ違うのはこつちのいちばん高い家の高さがかの地のいちばん低い家の高さに相当する点であろう。このちぐはぐな凹凸は「近代的感覚」があつてパリの大通りのような単調な眠さがない。うっかりすると目を突きそうである。また雑草の林立した廢園を思わせる。蟻ありのような人間、昆虫こんちゆうのような自動車が生命の営みにせわしそうである。

高い建物の出現するのははなはだ突然である。打ち出の小槌こづちかアラディンのランプの魔法の力で思いもよらぬ所にひよいひよいと大きなビルディングが突然現われる。建物は実は長い間にきわめて緩徐に造り上げらるのであるが、その薄ぎたない見すばらしい目隠しがある日に突然取り去られるからである。長い間人目につかない所でこつこつ勉強して力を養っていた人間がある日の運命のあけぼのに突然世間に顔を出すようなものである。

ネオンサインもあつちこつちとむやみにふえるが、このほうは建築とちがつて一夜にでもわずかな費用で取り付けられる。そのかわりにまたわずかに数分間でもはげしい降雹こうひょうがあれば半分通りはみごとにたたきこわされるであろう。考えてみるとネオン燈がはやり始めて以来、

まだ一度も著しい降雹がなかったようであるが、今に四五月ごろの雷雨性の不連続線に伴う鳩卵大の降雹がほんのひとしきり襲って来れば、銀座付近が一時はだいぶ暗くなる事であろう。その時が今からの確に予報できればどこかでネオンガスの買い占めが起こるかもしれない。しかし、降雹がなくとも、狂風にあおられた街頭の雑品が飛んで来てぶつかれば結果は同様である。その時のために今から用心したいと思う人は、簡単に金網で囲んでおけばいいと思うが、なんでもあすの用心をするということはおよそ近代的でないらしい。

暴風の跡の銀座もきたないが、正月元旦の銀座もまた実に驚くべききたない見物である。昭

和六年の元旦のちようど昼ごろに、麻布の親類から浅草の親類へ回る道順で銀座を通って見た

ときの事である。荒涼、陰惨、デイスマル、トロストロース、あらゆる有り合わせの形容詞の

総ざらえをしても間に合わない光景である。いつもは美しく飾り立てた小売り店の表には、実

に見すばらしい明治時代の雨戸がしめてある。大商店のショウウィンドウにははげさびた鏝戸

か、よごれた日除幕がおりている。死に物狂いの大晦日の露店の引き上げた跡の街路には、紙

くずやら藁くずやら、あらゆるくずという限りのくず物がやけくそに一面に散らばって、それ

がおりからのからび切った木枯らしにほこり臭い渦を巻いては、ところどころの風陰に寄りか

たまつて、ふるえおののきあえいでいるのである。言わば白粉ははげ付け鬚はとれた世にもあ

さましい老女の化粧を白昼烈日のもとにさらしたようなものであったのである。

これに反してまた、世にも美しいながめは雪の降る宵の銀座の灯の町である。あらゆる種類の電気照明は積雪飛雪の街頭にその最大能率を發揮する。ネオンサインの最も美しく見えるの

もまた雪の夜である。雪の夜の銀座はいつもの人間臭いほこりっぽい現実性を失って、なんとなくおとぎ話を思わせるような幻想的な雰囲気ふんいきに包まれる。町の雑音までが常とは全くちがった音色を帯びて来る。シヨウウインドウの中の品々が信じ難いような色彩に輝いて見えるのである。そういうときに、清らかに明るい喫茶店きっさてんにはいつて、暖かいストーブのそばのマーブルのテーブルの前に腰かけてすする熱いコーヒーは、そういう夢幻的の空想を発酵させるに適したものである。

中学校で教わったナショナルリーダーの「マッチ売りの娘」\*の幻覚のように、大きなクリスマスツリーが、神秘的に光り輝く霧の中に高く浮かみ上がる。あらゆる過去へのあこがれと、未来への希望とがその椏もみの小枝の節々につるされた色さまざまの飾り物の中からのぞいているのである。寺々の鐘が鳴り渡ると爆竹がとどろいてプロジツト、プロジツトノイヤール\*という声々が空からも地からも沸き上がる。シャン／＼／＼と雪ぞりの鈴が聞こえ、村の楽隊のセレネードに二階の窓からグレーチヘンが顔を出す。たわいもない幻影を追う目がガラス棚だなのチョコレートに移ると、そこに昔の夢のビスケット箱の中のメールコーチが出現し、五十年前の父母の面影がちらつき、左団次ともりの知盛が髪を乱して舞台に踊るのである。コーヒーの味のいちばんうまいのもまたそういうときである。

雪や寒い雨の日にコーヒーのうまいのはどういふわけであるか気象学者にも生理学者にもこれはわからない。空気が湿っていて純粹な「渴」かわきを感じないために、余裕のできた舌の感覚が特別繊細になっているためかもしれないと思われる。

銀座ぎんざでコーヒーを飲ませる家は数え切れないほどたくさんあるが、家ごとにみんなコーヒー

の味がちがう。そうして自分でほんとうにうまいと思うコーヒーを飲ましてくれる家がきわめて少ない。日本の東京の銀座も案内不便なところだと思ふことがある。日本でのんだいちばんうまいコーヒーはずっと以前にF画伯がそのきたない画室のすみの流しで、みずから湯を沸かしてこしらえてくれた一杯のそれであつた。

コーヒーに限らず、デパートの商品でも、あのようにたくさんにあるものの中で自分の趣味に適合するもの少ないのに困ることがしばしばある。コーヒー茶わんとか灰皿とかのこわれ<sup>はいつた</sup>た代わりを買いに行つても、近ごろのものには、大概たまらなくいやだと思ふような全く無益な装飾があつてどうにも買う気になれないのである。ネクタイがあまり古ぼけたので一つ奮発しようと思つて物色しても、あのたくさんな商品の中にこれをとつて手の出るのはまれである。これは自分の趣味嗜好<sup>しこう</sup>が時代に遅れたという事実を証明する以外になんらの意味もない些事<sup>さじ</sup>ではあろうが、この些事はやはりちよつと自分にものを考えさせる。こういう時にわれわれがもしも、自分のいちばんいやなようないちばん新しい傾向の品を買つて来て我慢して使つてみると、おしまひには案内それが好きになるかもしれない。殺風景だと思つていたコンクリートの倉庫も見慣れると賤<sup>しず</sup>が伏屋<sup>ふせや</sup>とはまたちがつた詩趣や俳味も見いだされる。昭和模様のコーヒー茶わんでも慣れればおもしろくなるかもしれない。それがおもしろくなるまでの我慢がしきれないで、近ごろの若い者は口癖にいうのは、畢竟<sup>ひつきよう</sup>もう先が短くなつた証拠かもしれない。もしも、これで百歳まで生きる覚悟があつたら、自分はやつぱり奮発していやな品に慣れる努力をするであらう。時代のアルプスを登るにはやはり骨が折れる。自分もせいぜい長生きする覚悟で若い者に負けないように銀座アルプスの溪谷<sup>けいこ</sup>をよじ上ることにしたほう

がよいかもしれない。そうして七十歳にでもなったらアルプスの奥の武陵ぶりようの山奥に何々会館、サロン何とかいったような陽気な仙境せんきやうに桃源とうげんの春を探って不老の靈泉をくむことにしよう。

八歳の時に始まった自分の「銀座の幻影」のフィルムははたしていつまで続くかこればかりはだれにもわからない。人は老ゆるが自然はよみがえる。一度影を隠した銀座の柳は、去年の夏ごろからまた街頭にたおやかな緑の糸をたれたが、昔の夢の鉄道馬車の代わりにことしは地下鉄道が開通して、銀座はますます立体的に生長することであろう。百歳まで生きなくとも銀座アルプスの頂上に飛行機の着発所のできるのは、そう遠いことでもないかもしれない。しかしもし自然の歴史が繰り返すとすれば二十世紀の終わりか二十一世紀の初めごろまでにはもう一度関東大地震が襲来するはずである。その時に銀座ぎんざの運命はどうなるか。その時の用心は今から心がけなければ間に合わない。困った事にはそのころの東京市民はもう大地震の事などはきれいに忘れてしまっていて、大地震が来た時の災害を助長するようなあらゆる危険な施設を累積していることであろう。それを監督して非常に備えるのが地震国日本の為政者の重大な義務の一つでなければならぬ。それにもかかわらず今日の政治をあずかっている人たちで地震の事などを国の安危と結びつけて問題にする人はないようである。それで市民自身で今から充分の覚悟をきめなければせっかく築き上げた銀座アルプスもいつかは再び焦土と鉄筋の骸骨がいこつの砂漠さばくになるかもしれない。それを予防する人柱の代わりに、今のうちに京橋と新橋との橋のたもとに一つずつ碑石を建てて、その表面に掘り埋めた銅版に「ちよつと待て、大地震の用意はいいか」という意味のエピグラムを刻しておくといいかと思うが、その前を通る人が皆円タクに乗っているのではこれもやはりなんの役にも立ちそうもない。むしろ銀座アルプス連峰の頂上ごとにそういう碑銘を最も目につきやすいような形で備えたほうが有効であるかもしれない。

人間と動物とのちがいはあすの事を考えるか考えないかというだけである。こういう世話をやくのもやはり大正十二年の震災火災を体験して来た現在の市民の義務ではないかと思うのである。

(初出・昭和八年二月、中央公論／岩波文庫『寺田寅彦随筆集 第四卷』所収)

(注)

・新富座——守田座もりたざの後身。守田座が明治五年(一八七二)新富町しんとみちように移転し、劇場機構、観

客制度を改革し、同八年、新富座と改称した。守田勘弥かんやを座主とし、明治十一年より十六、

七年ごろまで、俳優には九世団十郎だんじゅうろう、五世菊五郎きくごろう、初代左団次さだんじなどを集め、また作者に

は河竹黙阿弥かわたけもくあみを擁し、いわゆる新富座時代と言われる歌舞伎最後の黄金時代を現出した。

大正十二年の震災で焼失。

・先代の左団次——初代市川左団次いちかわ(1843—1904)のこと。四世市川小団次こだんじの養子で、河竹黙

阿弥あみの庇護のもとに新作物に一境地を開き、団、菊とともに明治期の名優とされた。

・団十郎——九世市川団十郎(1838—1903)のこと。明治劇壇の巨星と仰がれ、風采ふうさい、音調、

弁舌にすぐれ、立て役、敵役かたきやく、女形をかね時代物、世話物ともにすぐれていた。

・練兵場——現在の日比谷公園ひびやこうえんのところ。江戸時代にはこの付近は松平肥前守まつだいらひぜんのかみなどの大名屋

敷であったが、維新後、大名屋敷はこわされ、練兵場となった。現在のような公園となっ

たのは明治三十六年(一九〇三)以後である。

・「緑の扉」——緑の扉、あるいは green door という成語は未詳。「緑」は幼い時代の形容に使われるので、著者の造語か。

・リーディング——Reading。 ロンドンの西方五十キロばかりの町。

・竹葉——うなぎ屋の名。

・毘沙門かなんかの縁日——毘沙門の縁日は、毎月五日、すなわち五日、十五日、二十五日であった。

・桃川如燕 (1832—1898) ——講釈師。本名杉浦要助。すぎうらようすけ 江戸に生まれ、伊藤燕晋いとうえんしんの門人となり、後、初代桃川如燕となる。からだが大きく、坊主頭で、つねに酒気をおびて高座へ上がったという。ひやくびようてん 百猫伝を得意としたので「ネコの如燕」と呼ばれた。

・伊藤痴遊 (1867—1938) ——政治家、講釈師。東京区会、市会、府会議員を経て、後、政友会に所属し、東京第三区選出の代議士(二回)に当選した。著書に「西郷南州」さいけいなんしゅう「井上侯全伝」いの上「明治裏面史」などがあり、また晩年個人雑誌「痴遊雑誌」を発刊した。

・「十二か月」——銀座四丁目にあったしるし屋の名。

・岩谷天狗の松平氏——岩谷松平 (1850—1920) 明治時代煙草たばこが専売にならぬ前の煙草製造業者。自社の煙草の名を赤天狗、白天狗、金天狗など十数種の煙草に「天狗」の字を付けて命名したので、通称、天狗煙草といわれた。宣伝にもいろいろ新しいアイデアを考え、赤のフロックコート、赤塗り馬車、赤煉瓦あかれんがの店に住んだ。

・ピンヘッドやサンライズ——煙草が専売にならぬ以前、いずれも京都村井兄弟商會むらいで発売した煙草。

・岸田吟香(1833—1905)——新聞記者。おかやま岡山県の人。アメリカ人へボンに学び、英語辞書編纂。へんさん

新聞発刊。後に東京日日新聞編集に従事し、また東亜同文会、同仁会を創立した。

・竹仙——ちくせん竺仙の誤記。竺仙は明治初年よりの染物屋で当時は浅草寿町あさくすいとうきぢやうにあったが、太

平洋戦争後、現在の厩橋うまやばしに移った。

・伊勢由——もと日本橋にあったはき物屋。現在はない。

・「銀座線」——相対性理論に世界線というがあるので、それになぞらえた表現。

・デイスマル——*dismal*. 陰気な、すげこ。

・トロストロス——*trostlos*. 慰めのない、やるせない(ドイツ語)。

・「マッチ売りの娘」——アンデルセンのおとぎ話。ナショナル・リーダーは昔かなり広く使われた英語教科書。

・ブロージット・ノイヤー——*Prosit Neujahr*. 新年おめでとう、というドイツのあいさつ。

・グレーチヘン——*Gretchen*. ドイツの女の名。ゲーテの作品などにもこの名が出て来る。

・F画伯——藤島武二かとうたけふじであるが、つ。

・エピグラム——*epigram*. 警句。